

# 「地理オリンピック」引率記

－第1回アジア・太平洋地区大会（台湾・新竹市）報告－

伊藤 智章

## はじめに

7月17日火曜日。表彰式の会場は、一瞬どよめき、そして大きな拍手に包まれた。日本人が出場するのは7年ぶり。全く手探りの状態から予選を行い、選ばれた4名のうち2名は海外旅行も初体験。こんな「地理・日本代表」チームから2名のメダリストが誕生したのである。金メダルこそ逃したものの、堂々の銀と銅である1)。

台湾の酷暑の下、記述、フィールドワーク、マルチメディアの三部門のテストが英語で行われた。アジアで初めて行われた地理の国際大会。規模こそ小さかったが、選手達の意気込みも、スタッフの熱意も「オリンピック」と呼ぶにふさわしい大会だった。

素晴らしい大会を演出していただいた台湾オリンピック委員会のスタッフに敬意を表しつつ、亜熱帯の5日間を報告したい。

## 1. 熱烈歓迎に緊張

日本代表選手は4名。東京から3名、大阪から1名である<sup>1)</sup>。それぞれ成田空港、関西国際空港から別々に台北入りし、空港から専用バスで南下。新竹（シンチュー）市に入った。

会場は、「国立科学技術園実験高等中学校」という高校である。その名が示すように、今や台湾の基幹産業となった半導体・エレクトロニクス関連の工場・研究所が集まった「新竹サイエンスパーク」内にあり、普通教科を英語で教えるプログラムや、理数系の教育に力を入れている実験高校である。

到着早々に体育館で歓迎式典と立食パーティー。若い女性の先生による流暢な英語の司会で粛々と式典が行われた。周りを見渡せば学校の至る所に「地理オリンピック」ののぼりが並び（写真1）、学校の「伝統芸能楽団」の歓迎コンサートがあり、現地のスタッフや、揃いのポロシャツに身を固めた高校生ボランティア達が入替わり立ち代り挨拶に来る。流暢な英語を操るスタッフ達。日本代表一同、「大変なところに来てしまった」という思いで初日の夜を過ごした。



写真1 地理オリンピックの幟（のぼり）



**写真2：到着直後の日本代表団（7月12日：夕刻）**

左から 井田教授（筑波大学）・松田君（筑波大学附属駒場高校2年）・角田君（同2年：銀メダル受賞）池田君（同1年：銅メダル受賞）平井君（関西創価高校2年）・泉教諭（専修大附属松戸高校）・

## 2. ライティングテストで好成績。

二日目の午前中から早速テストである。試験第一日目はライティングテストである(写真3)。問題は、各国の引率教員が作成し、現地委員会で編集している。日本でもおなじみの雨温図を読み取る問題から、世界の貿易、オーストラリアの自然環境など、単純な知識を問う問題から、図表から読み取れる事柄を説明する問題まで様々であった。

生徒達が試験を解いている間、教員団は採点基準会議を行った(写真4)。出題を担当した教員が出題意図、配点のポイントを説明し、議論した上で実際の採点は台湾事務局の採点官が行う。午後の市内観光の間で採点が行われ、夕食後改めて引率教員団が答案をチェックし、採点に疑義があれば申し出るという、手の込んだチェック体制がとられた。

ライティングテストの日本代表の成績は一様に高く、同席していた台湾の採点官を悔しがらせていた。台湾は、2004年から過去2回の地理オリンピック（世界大会）に選手を送



**写真3 ライティングテスト**

り込んでいて、地理オリンピックに関しては、我々よりも先輩格である。今回のアジア大会にも約 400 名の応募があったそうだが、「中国語で問題を作って、純粋に地理の力で選んだんですよ。でも、英語がね……。」日本代表の予選の試験問題はすべて英語。「英語で地理の試験」に怯んでしまったか、予選参加者は台湾よりもずっと少なかったが、学力と語学力では互角あるいはそれ以上の実力を出したようである。

### 3. フィールドワーク試験

フィールドワーク試験は、午前中のフィールドワークと、午後の個別試験の二段階で行われる。午前中は、選手達は 4 人ずつ、4 つのグループに分かれて、新竹市内を決められたコースに従って歩く（写真 5）。午後はフィールドに関する記述式の試験が課せられる。試験は、各個人が解く Part-A の問題と、一緒にフィールドワークをしたグループで与えられた課題に対して一定時間内で議論して結論を出す Part-B の問題の二種類である。

今回の試験では、大会史上初めて個々の選手にハンディ GPS レシーバーが渡された（写真 6）。これは、GPS 受信機の世界的なメーカーである米国 GARMIN 社が、台湾で GPS 受信機をライセンス生産していることも関係している<sup>2)</sup>

教員用にも一台借りたが、次のチェックポイントへのウォーキングナビゲーションや、たどったルートを GIS 上で表記する機能は、フィールドワークの未来を予感させる。ただ、初めて GPS を触る選手達は、前夜に使い方説明会があったものの、随分と操作にてこずったようである（写真 6）。

個別試験では、新竹市の新旧の地形図を比較しながら、土地利用の変化、人口集中地区の拡大、都市と農村部の関係と問題点の提起など、日頃地理の授業でもあまり論じさせないような問題が次々に出題された。集団試験では、1980 年にサ以降の自然および社会環境の変化についてよかった点と悪かった点を挙げさせた上で、「都市の農村の住民が共生し、持続的な発展が可能なまちづくりをするためにはどのような方策が必要か」という問題に対して、4 名 1 組の国が異なる選手達が互いに議論して回答を書く試験が課せられた。この試験に対しては、各チームごとで順位をつけて団体賞が授与さ



写真 5 フィールドワーク試験



写真 6 GPS と格闘するマレーシアの女子選手

れた。

大会オブザーバーである IGO（国際地理オリンピック協会）の副会長のハンク氏（オランダ）からは、採点会議の席上、この試験を非常に高く評価した上で、「日本の生徒達にはもっと“Decision making”（意思決定力）をつけさせる訓練をして欲しい」とのコメントをもらった。地理的な知識は水準以上に持っている日本選手達が、このようにオープンエンドな答えの試験に苦慮する姿は、そのまま今の日本の地理教育の課題を突きつけられたように思えた。

#### 4. 現地の教員との交流

大会 4 日目、選手達がマルチメディアテストを受けている間、我々引率教員は、台湾の地理教員を集めた国際シンポジウムに参加した。IGO のハンク副会長の基調講演の後、各国の代表がそれぞれの国の地理教育事情について講演し、台湾の教員との意見交換をするものである。日本からは、筑波大学の井田仁康教授が講演した。

多彩な報告以上に驚いたことは、参加者の中に女性が多いことである。恐らく半数以上、7 割近くが女性教員であった。台湾代表の引率教員 2 名も共に女性、アシスタントをしてくれた地理学専攻の学生も女性。台湾代表選手にも、4 名中 2 名が女子生徒だった。しかも、パーティーの余興でストリートダンスを披露してしまうような、今どきの（？）女子高生達だった。

なぜ地理の教員に女性が多いのかについて、大会のリーダーを務めたスンミン女史によれば、台湾では、つい最近まで教師の地位が低かったこと、女性が自立して働ける職業が限られていたことも影響しているのではないかとのことである。

待遇が改善された現在でも、GIS 用いた全国的な教材開発や、国際地理オリンピック等の大きなプロジェクトでは女性の地理教員が活躍している。台北と台中の市立女子高級中学には「GIS 教育中心（センター）」が置かれており、2004 年から始まった全国的な教材開発プロジェクトをリードしている<sup>3)</sup>

台湾では、現政権になって以来、学校の設立者の表記が「台湾省立」から「国立」に変わり、国民意識の高揚を促す体制が進められているという。このため、高校（高級中学）でも世界史が必修化され、地理の時間が削減されている。「地理教育を守る」という信念と、実行力、そして地理を愛する女性の人材育成に関しては、日本は台湾に学ぶところが多い。



写真 7 台湾の教員を前に基調講演するハンク氏（右端）

## 5. 終わりに

5 日間の日程で行われた第一回アジア太平洋地区地理オリンピック。連日 35℃を越える猛暑の中で、体力的にも精神的にも非常にタフな大会であったが、生徒も教員も非常に多くのものを学び取ることが出来た。

予選に 6 万人が参加し、決勝戦はテレビで中継されるというメキシコ代表。フィールドワークテストでは、引率の先生が「私達の生徒は、街の看板の漢字が読めないことを配慮するべきだ」と主張したが、先生の心配をよそに、メキシコの生徒は素晴らしい答案を書き、総合成績でもすべての選手が入賞した。華僑学校の生徒 4 名で構成されたマレーシア代表の先生は、マレー人優遇政策の中で、中華系の学校に通う生徒が大学進学でいかに不利な扱いを受けているかを主張し、高校卒業後は台湾や中国に留学生として人材を出さざるを得ない状況や、「愛国心高揚」の為に歴史教育が重視され、地理を取る生徒が減っていることを報告し、台湾の教員と中国語で白熱した議論を展開していた。

IT 化が進み、世界が近くなったとはいっても、やはり重要なのはこうした人と人との交流である。世界を相手に真剣勝負を挑み、友情を培った生徒達。毎日英語漬け、中国語漬けの環境の中で思い切り議論した引率教員。この 5 日間は、参加したすべての人々にとって、かけがえの無い、非常に充実した時間だったことは間違いない。この大会での成功経験を、是非来年（2008 年）の世界大会（チュニジア・チュニス市）につなげていければと思う。また、いつの日か、国際地理オリンピックが日本で開催され、世界中の若き Geographer が日本に集う日が来ることを願って止まない。

末筆ながら、本大会への参加のために、基金への寄付を始め、ご支援を頂いた皆様に、心より御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

- 1) 国内選考会は、5 月上旬に東京および大阪会場で行われた。実行委員会が作成した筆記試験（英文）に基づき、上位 4 名を代表選手として選出した。
- 2) ちなみに、金メダル・銀メダル獲得者への副賞は、この GPS 受信機（500 \$ 相当）だった。
- 3) 台湾における GIS 教材開発プロジェクトについては以下の Web サイトを参考にされたい。漢字を読めばおよその内容が理解できる上、そのまま GIS ソフトで読み込めるデータもダウンロードできる。
  - GIS 高中地理加油站 (<http://www.gisedu.geog.ntu.edu.tw/>)
  - e 世代 GIS 推廣計画成果發 (<http://www.gcc.ntu.edu.tw/Chinese/Education/eGIS/>)

---

伊藤 智章(いとう ともあき)

静岡県立吉原高等学校教諭

1973年 静岡県生まれ

ホームページ “いとちり”

<http://www.itochiri.jp>

補充說明

有關文中筆者提到「臺灣高中地理老師，女老師多於男老師的原因，是根據競賽承辦人的說法...」一節，本人在讀到該篇文章後，曾去函說明我當時的意思應該是：

在過去，臺灣各師範大學的地理系都屬於文學院（非師範大學的地理系則屬於理學院），招收的高中生也以文組生為主，文組生的女生多於男生，所以地理老師也是女生多於男生。最近幾年，各地理系開始接受高中文組或理組的學生。

但是因該文已經刊出，無法更正，特此補充說明。

沈淑敏謹致